

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成25年度病害虫発生予報第11号について

平成25年度病害虫発生予報第11号を発表したので送付します。

平成25年度病害虫発生予報第11号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稻	1 いもち病（苗いもち）	—	2
	2 スクミリングガイ	並	2
施設野菜全般	1 病害全般	—	2
冬春きゅうり	1 うどんこ病	並	2
	2 べと病	やや多	3
	3 灰色かび病	並	3
	4 褐斑病	やや少	3
	5 黄化えそ病	前年、前々年より多い	3
	6 ミナミキイロアザミウマ	並	4
	7 タバココナジラミ類	並	4
	8 病害虫全般（改植時の留意点）	—	4
冬春ピーマン	1 うどんこ病	やや多	4
	2 斑点病	並	5
	3 黒枯病	前年、前々年と同程度	5
	4 アザミウマ類	やや多	5
	5 タバココナジラミ類	やや少	5
冬春トマト	1 葉かび病	並	6
	2 灰色かび病	やや多	6
	3 タバココナジラミ類	並	6
	4 トマト黄化葉巻病（TYLCV）	前年、前々年と同程度	6
冬春いちご	1 うどんこ病	並	6
	2 灰色かび病	やや多	7
	3 ハダニ類	やや多	7
	4 アブラムシ類	やや多	7
	5 オンシツコナジラミ	—	7
カンキツ （露地栽培）	1 そうか病	並	7
	2 かいよう病	並	8
	3 ミカンハダニ	やや少	8
茶	1 カンザワハダニ	並	8

○作物の生育状況（2月中旬）

冬春きゅうりの促成栽培は収穫期、半促成栽培は定植期、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは収穫期であった。

○向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年並または高い確率40%、降水量は平年並の確率40%、日照時間は少ない確率40%と予想されている。
（1か月予報 鹿児島地方気象台2月21日発表）

○発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. いもち病（苗いもち）

[防除上の注意]

- (1) 育苗時に発生がなくても本田で早期に発生する恐れがあるので、移植時の箱施薬を徹底する。

2. スクミリンゴガイ（並）

[予報の根拠]

- (1) 1月下旬の未耕起水田（宮崎市、西都市、新富町）での㎡当たり総貝数3.9頭（平年4.9頭）は平年並、生貝率11.4%（平年39.8%）は平年よりやや少である。
- (2) 用水路での㎡当り総貝数8.4頭（平年35.2頭）は平年より少、生貝率94.8%（平年54.0%）は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 水田に生息する貝は、耕耘により破砕し防除する。この場合、土壌は硬いほど、耕耘ピッチは小さいほど、貝は大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さによる殺貝効果はあまり違いがなく、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘することで殺貝効果が高まる。
- (2) 1月下旬調査では用水路での生貝率が高かった。用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入り口にネットを設置する。
- (3) 田植後2～3週間は、できるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- (4) 貝の生息量が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

施設野菜全般

1 病害全般

- (1) 気温の変化等には細心の注意を払い、適宜換気をする等施設内の温湿度管理を徹底する。
- (2) 病害が多発してからでは薬剤による防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。特に燃油コスト低減のため多重・多層被覆にしているところでは、夜間に加温機が作動しないため高湿度時間が長く病害の発生が助長される傾向があるので注意する。
- (3) 今後は夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日は施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要である。
- (4) 草勢の低下は各種病害の発生を助長するので、草勢の維持管理に努める。
- きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など
ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など
トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

冬春きゅうり

1 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査における発生面積率31.6%（平年46.4%）は平年よりやや少、発病葉率4.5%（平年6.4%）は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- (4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので、促成栽培と同様の注意が必要である。

2 ベと病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率79.0% (平年67.7%)、発病葉率18.3% (平年13.9%)はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率5.3% (平年7.8%)は平年並、発病果率0.1% (平年0.4%)は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防及び発病初期の防除を徹底する。
- (3) 耐性菌が発生しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率21.1% (平年42.0%)は平年よりやや少、発病葉率0.7% (平年8.3%)は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場合は草勢低下を招き好ましくないので、適正な肥培管理に努める。
- (3) うどんこ病、べと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。
- (4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

5 黄化えそ病 (MYSV) (前年、前々年より多い)

[予報の根拠]

- (1) 2月の巡回調査での発生面積率42.1% (前年0.0%、前々年20.0%)、発病株率0.2% (前年0.0%、前々年0.1%)は、いずれも調査を行った4年間で最も高くなっている。

[防除上の注意]

- (1) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激にほ場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- (2) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し、埋却処分するか完全に枯れるまで密封処理する。

(3) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局（農業改良普及センター）または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

(4) 改植時には、後述「8 病害虫全般（改植時の留意点）」を参照のこと。

6 ミナミキイロアザミウマ（並）

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率68.5%（平年63.1%）、100葉当り虫数20.5頭（平年43.2頭）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

(2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。

7 タバココナジラミ類（ハイトイフ°B(シルハ°-リーフコナジラミ)、ハイトイフ°Q）（並）

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率47.4%（平年38.8%）は平年よりやや多、100葉当たり虫数1.6頭（平年8.6頭）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。

(2) 効果のある殺虫剤が少ないことから発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。

(3) 施設内外の雑草は、タバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

(4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

8 病害虫全般（改植時の留意点）

[防除上の注意]

(1) ウイルス病を媒介するタバココナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。

①前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。

②栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。

③抜根後20日間以上蒸し込む。

④蒸し込み期間中は、有色粘着板を設置し成虫を捕殺する。

⑤後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。

(2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

(3) 苗の購入の際は、病害虫の発生状況を十分確認する。特にミナミキイロアザミウマが寄生していたり被害痕が多い苗は避けるとともに、ウイルス病の発生が疑われるときは直ちに株を破棄する。

また、農薬の散布履歴を確認し、育苗期に粒剤の使用がない場合は直ちに施用する。

冬春ピーマン

1 うどんこ病（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査における発生面積率69.2% (平年55.2%)、発病葉率11.0% (平年7.6%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないように適正な水管理に努める。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、2回以上の防除を実施する。
- (4) 微生物農薬は予防的効果が主であるため、定期的に化学農薬も併用する。

2 斑点病 (並)

- (1) 2月中旬の発生面積率23.1% (平年29.0%)、発病葉率3.9% (平年3.4%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高温多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- (2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3 黒枯病 (前年、前々年と同程度)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬における巡回調査では発生を認めていない。
(発生面積率：前年0.0%、前々年0.0%、発病葉率：前年0.0%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) ほ場内が多湿条件にならないように、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- (2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

4 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬におけるミナミキイロアザミウマの発生面積率53.9% (平年28.2%) は平年より多、10花当り寄生虫数1.2頭 (平年0.8頭) は平年よりやや多である。
- (2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率38.5% (平年22.1%)、10花当り寄生虫数7.2頭 (平年4.9頭) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
- (2) ミナミキイロアザミウマに対し天敵による防除を実施しているほ場において、ヒラズハナアザミウマの発生が多い傾向にあり、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
- (3) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。
- (4) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときは更に連続した防除を徹底する。
- (5) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (7) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出しや有色粘着板による成虫の捕殺、土中・地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆など、総合的な防除対策を講じる。

5 タバココナジラミ類 (ハ[・]イタイフ[°]B(シルハ[・]リーフコナジラミ)、ハ[・]イタイフ[°]Q) (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬における巡回調査では発生を認めていない。
(発生面積率：平年8.7%、100葉当たり虫数：平年0.5頭)
[防除上の注意]

- (1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ類（4ページ）を参照のこと。

冬春トマト

1 葉かび病（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査における発生面積率30.0%（平年16.1%）は平年よりやや多、
発病葉率2.6%（平年2.7%）は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の茎葉での発生面積率70.0%（平年36.4%）、発病株率24.5%（平年3.8%）はいずれも平年より多である。
(2) 果実での発生面積率20.0%（平年11.6%）、発病果率1.1%（平年0.6%）はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
(2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 タバココナジラミ類（ハイトタイプB（シルハ-リーフコナジラミ）、ハイトタイプQ）（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率30.0%（平年41.8%）は平年よりやや少、100葉当たり虫数3.5頭（平年3.0頭）は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ類（4ページ）を参照のこと。

4 トマト黄化葉巻病（TYLCV）（前年、前々年と同程度）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査では、1圃場で微発生。
(発生面積率：前年0.0%、前々年0.0%、発病葉率：前年0.0%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため必ず株全体を除去する。
(2) タバココナジラミ類（媒介虫）の防除を徹底する。

冬春いちご

1 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査における葉での発生面積率7.7%（平年34.8%）は平年より少、
発病葉率1.5%（平年3.2%）は平年よりやや少である。
(2) 果実での発生面積率7.7%（平年7.8%）は平年並、発病果率0.9%（平年0.4%）は平年よりやや多である

[防除上の注意]

- (1) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする。
- (3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに除去しほ場内に放置しない。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率15.4% (平年10.8%)、発病果率0.6% (平年0.5%)はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので換気に努めるとともに、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
- (2) 病果や病葉は早めに摘除して、ほ場内に放置しない。
- (3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率84.7% (平年62.3%)は平年よりやや多、寄生株率31.2% (平年15.2%)、葉当たり虫数15.8頭(平年3.2頭)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率30.8% (平年27.5%)は平年並、寄生株率7.7% (平年3.2%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

5 オンシツコナジラミ

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低いオンシツコナジラミが確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

カンキツ(露地栽培)

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査での発生面積率5.6% (平年1.7%) は平年より多、発病葉率0.4% (平年0.1%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
(2) 春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行う。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査での発生面積率5.6% (平年23.6%) は平年並、発病葉率0.6% (平年2.6%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
(2) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率22.2% (平年42.8%) は平年よりやや少、寄生葉率0.6% (平年10.0%) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上~中旬)にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査における摘採面での発生面積率7.7% (平年34.8%)、寄生葉率0.3% (平年2.2%) は平年より少である。
(2) 茶樹すそ部での発生面積率61.6% (平年68.5%) は平年並、寄生葉率4.3% (平年8.4%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は増殖が始まる前の密度の低い時期(2月下~3月中旬)で、すそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

- 3 発生量（程度）の区分

多	い	（高	い）	やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多	い	（やや高	い）	平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少	ない	（やや低	い）	平年並の外側 20%の度数の入る幅
少	ない	（低	い）	やや少ないの外側 10%の度数の入る幅 (平年値は過去 10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。

- (1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。

ホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 倉富

TEL:0985-73-6670

FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp